

一部に虫喰、折損があり判読出来ない部分があり、そこには□としておいた。

この八重禪歌（八重しで歌とも）は和歌をたて、よこ、斜めに組合せ、その交叉する所の文字を共通させるという技巧歌で植田義方の求めに応じて贈ったもので、寛政二年（一七九〇）五月に義方宛の書簡（義方後裔 植田哲郎氏蔵）を近藤恒次博士の「賀茂真淵と菅江真澄」に翻刻されたものに

「五月の空めつらかに晴々敷、みな月覚え侍り。暑さにむかひ候得ども、いよく御さはやきおはすらんとめで悦侍りぬ。されば先に聞え給ふける八重にたすぎたんさく、とみにかきてまねるべくを、おのれ初春より髪の内にもゝ出来、春中いときはに成候て、そのいたつきにてこころむすばれ、筆とり候事むづかしく、やゝ此のころはやきてなむかき侍れども、いとく老筆になりて見苦しく、かたはらいたうこそ。短尺の歌、ちかきころよみしをとこのみ給ふにまかせて、つたなき歌なれとも去年ことしよみし歌かきて奉りぬ。御方々へも、よくよく聞えさせ給はれかし。隼人こと、よろしく申上たくとそ申侍る。めてかしこ。

さつき日

繁

榮作のきみへ

とあつて短尺の歌は、この書簡の後に十首ほど書かれてい
るものの八重禪の歌は、どこにも所載されていない。

註

1 隼人 繁子孫 森家十三代隼人壽治と称した。義方と同じく今春流太鼓を学んでいた。文政元年奥居翁靈祭に祝詞を奉っている。

2 榮作 義方の隠居名 民俗学者 菅江真済の師 安永九年養嗣男蔵に七三郎を襲名させている。

稲村喜勢子

「はこね日記」

史の会

さみたれもいつしか名残なう晴ワたり あつけさいやましぬる此日比 我せ子近よしハ 近きとしころいとよわくなりてたれこめかちなるを すゝミかてら心のはへに さかミなる箱根の山の出湯あみてんやとそゝのかし 聞え給ふ人の侍りけれハ けにもとてこれかれかたらひあわせ まち子里可子におのれもともにときくもいとうれしう 五たり六たりにて ミな月のはしめ三日になん草の廬出立ぬ 鶏頭山大徳のミもとよりせうそこして

帰り来てとくもかたらへ名にしあふ夏しら糸の瀧のなかれを

との給せる 晋斎ぬしよりも

道の辺や其名ところ□山水をことの葉くさにくつしてよ君

なと人々心はえあるも むら鳥の立のいそぎにあとをもとめす 黒戸の濱より舟にのりぬ 人々とゝもにこと子國子もおくりきて名こりをしけなるに はあけぬれハ見るまにかかけすかになりもてゆくもさすかにて 袖のしほたるゝもほたしなりや おひてよけれハいつしかひようくたる海はらになりゆき 帰りミすれハふる里の山々さへはるかなミ路にしつめるこゝちす さかミの山々ハめ近くなりぬ さかミねの松見えそめてふる里のおもかけさへも

なミ路へたつる

なといふほともなくかな川の浦につきぬ 舟出せしハ午時はかりとおほえしに ひつし過ぬほとにわたりて舟のあしはやきをめてあへり 行かひしけき東路めつらしうゆくほとか谷を過か比 日もにしにかたふき稲の青葉に風わたりいとすゝしう 日くらしの声をきゝて

旅衣袖吹かへす夕風にすゝしさそふる日くらしのこゑきくからに とつかなるいし田やてふうまやに宿る 夜雨ふりぬ

四日 晴 朝とく立いつ 藤沢の遊きやう寺を拝みて 小和田でふところにしはしやすらひ馬入河を渡 大磯のすく山城やといへるにとまりぬ 今宵も雨

五日 今朝も晴 うれしう立いつる 名にきこえし鴨立沢
 八道のほとりなり 立よりて見るにいまハ鳥などのふり居
 へきさまなし かたはらに廬あり あるしとおほしきおう
 な出きて持出せるハ 長さ五尺はかりなるにふしひとつあ
 る竹のつゝなり 西行もち給ひしとなんかたる いかなら
 んめつらし自筆のしきしとて

つれもなくなりゆく人のことの葉を秋よりさきの
 もみちなりける

また飛鳥井卿の御たにさく

あはれさハ秋ならねともしられけり鴨立沢のむかし
 たつねて

とありけるもいとたうとく かたはらに旅すかたなるかの
 法師の木そうあり またとらこせん十九才にてあまとなり
 しすかたをも見つゝ小磯なるとゆきく 梅沢てふ所より
 近よしハ里か子まぢ子をともし小田原をさしてゆく お
 のれらハ三たり四たりにて いゝつみのくわん世音にまう
 てんとてわかれゆく ミちの右ひたり見わたしひろき田つ
 らなり草とるをとめの 小笠ならへてうたひつれたる田歌
 もところからいとをかし むかへる方に富士のねみゆけ
 にミな月のもちに消 其夜不降ときくしら雪の ふるさと

六日 天気よし ここを立出かちにてゆく 谷河ありて大き
 なるいはに くだくる浪の音たかし

谷河のいはこす浪にひゝきあふはこねの山のせみの
 こゑく

いとかしまし わけのほる坂みちいとくるし ときはの瀧
 としるしあるもに しはし立より手々にむすひなとしつゝ
 すゝしうなりぬれハ たとりくて宮の下てふところのな
 らやといへるにやとりもとめて しはしかほと湯あみせん
 とひと間をかりのすみかとそする せうしに桜のさかりな
 るをゑかきて すみれ早わらひなとなつかしき春の野にあ
 そへるこゝちするもいとをかし 此山邊には時鳥のあまた
 なりと南俣ぬしのかたりたまひしか 水無月にしなれハ
 いかにそやなとおもう給へらるゝ折しも こゑきゝ初て里
 か子

いつこともかけハ見えねとたそかれに かたらひ初る
 山ほとゝきす

おなしことをおのれも

めつらしくこゑきゝそむるけふよりハ友とたのまん

山ほとゝきす

といゝつ宿れるところハ ひんかしによりたるミナミおも

にて見しよりもめ近けれハゆきても見まほし 右にミわた
 す山々ハ雨ふり山につゝきたるとなん ひたりの方にハ心
 さしゆくあしからの山 ふもとにつゝきたるやうにしろく
 見ゆるハ小田原のミ城なりとそ むまの時過か比いゝつミ
 くわん世音を拜ミ 先へゆきし人々待給ふらむとていそぎ
 ゆくに清き河あり めなれぬ石川なれハめつらしう見つゝ
 わたる 舟よせんとするとき神とゝろきぬとおほえて 人々
 もよゝといへハさにハあらて ふねといしとのすれあふ音
 なりとぎくもいとをかしきや 此河ハさかハ川の上つ瀬な
 り しもつ瀬ハあつま路にて れんたいといふものにてわ
 たすとそ わたしもりのかたりぬ 先へゆきし人々ハとく
 こえ給ハんといひつゝ おくれしといそきて小田原のすく
 にいたれハ富士本てふうまやよりむかひ人に出あふ ミた
 りの君ハ今まで待給ひしか日もかたふきぬれハ湯本にてま
 ちたまハんといひおきて出給ひしときゝて いそぎにいそ
 き見つゝゆく とらやのとのあしからまほしなとたはむ
 れいひつゝ過る比小雨降出ぬ 此ほとりよりはこねの方ハ
 晴くもりかゝるハ常なりと行かふ人のかたりぬ からうし
 て湯本にいたりけれハ かなたにも待よろこひぬ はしめ
 て湯あみしミ山辺ハ すゝしときけとこよひいとあつし

てにて 見わたす山々のたゝすまひいとおもしろく まへ
 は谷とおほしく ゑに書たらんやうなり ひんかしにあた
 れる明星かたけとかいふなるミねに かすかにたはこくゆ
 らすけふりはかりに見ゆるハ雲にさりけり 見るかうちに
 みねをおほひかつハはれゆきていとめつらし

天空のものとおもひししら雲を手にとるはかり見るも
 をかしき

日暮はてゝ雨降いつる

七日 雨ひねもすおやミなし つれくなれハ人々湯あみ
 のほかハひかたにあかれるあしかのやうなり またつれ
 くくのなくさにたらへ物したらむことをせんとてくし引て
 さたむ けふハまち子とおのれなり

八日 晴くもり定めなし 夕つかた神おとろくしうなり
 ていと物わひし けふハかね子ふし子なり

九日 雨をやミなし ほとゝきすをきゝて

五月雨のこちこそすれおとつるもきのふもけふも

やまほとゝきす

かたらふこゑを友としきくもたのし

ほとゝきす山に帰るといふめれハ此谷の戸やすミか

なるらん

とおもハる 此やとりに暮うちたまふ井上のうしあそひあ
給ひて日毎にとひとハれうちとけかたりあふ けふのまか
なひ里か子と近よしなれと 名のミにてあそひあるきてか
けたに見せねハ 里か子ハいかにせんくわふるにかな
はらいたくてまち子なと手つたふ また女とち瀧にうたれ
んとて髪あらふ 鶯の声そこはかなくなりきえけれハ

谷の戸の古巢に帰るうくひすを枕の下にきくならし
ぬる

十日 晴わたり日かけめつらし 浅草のなかまちてふとこ
ろのさかひや何かしとて下つかへわらハなとめしつれて
こゝにあつきをしのきにとし毎に來給ふとてかたりあふ
とし老給へとまめ人におはして おのれらこたひはしめて
なれハねもころに何くれとおしへさせ けふハ堂堂ガかしまて
ふところの出湯見にともなハんとてそのかし給ふめれハ
女とちまゐりぬ 四五丁はかりゆくほともなくつきぬ
こゝもならやといへるにやすらひ湯あミなとす こゝより
白糸のたき近く見えけれハ立より見んとてすこし下りゆく
に 浪の音たかく谷河のさかまく水岩にくたけてしら雪の
ことし ミねより落ちる瀧いと長くけに白糸を引たらんや
うなり 大徳の夏しら糸の瀧とのたまひしをおもひいて

立よれハすゝしかりけりけに人の夏しら糸の瀧といひ
ける

袖ひちてむすひてを見んあしからのミねより落るたき
のしら糸

と近よしひつ 里か子も

わけのほるはこねの山のかひありてあつきをよそにし
ら糸のたき

といふ すゝしさあかねと暮なんとすれハ立帰りぬ

十一日 てい気よし けふハふる里の神のミまつりなれハ
とて心はかりのミきミあかしをさくけて酒をさす かの浅
草のまめ人けふハそこら星てふところの湯あミにともなひ
たまふ つたやといへるにてゆあミしそこゝ見めくるに
うしろなるいはのはさまより湯あいつるなかれを立より
て見れハわきかへる湯なり いとめつらし 夕つかた立帰
る山のはあかう出る月かけめつらしうなかもやるに やを
らかきくもりて雨ふり出ものわひし

十二日 今朝ハ晴ぬれハけふは木賀てふところへ立こゑ
しはし湯あミせんとて旅の調度とりあつめなとすれハ
れのまめ人井上うしなとわかれをゝしミたまふ こなたも
同じ心ちす またとひとはれんことをちきりて立いつ 坂

ミちけハしときゝてうしろめたくおも物から はたまち
はかりゆきて下る坂なれハ行先いかにそや なといゝつゝ
火うちとてゝ見たせは むかふなる山のはに家居見え
けるハいかなる所ならんと行あふ人にとへハ 宮の下てふ
ところなりといふ ここにもかゝる名やあるかと いふか
しうとへハ 二つハなし いつこよりとたつぬるに宮の下

よりとこたふれハ さるは出たまひし所ときゝて人々もき
つねたぬきにまどハされし心ちす 見たせは め近けれ
と谷川のへたてありて山のかひめぐり來ぬれハなりときく
もいとをかし からうして下りゆくほともなく木賀につき
ぬ 亀やといへるに宿る こゝの湯をミなによきとて老た
るも若きもやとれる人多くてうるさけれハ おもひこしと
ころなれとなれにしところなつかしうて立帰るへきあらま
しかたりあふ

十三日 くもりぬれとけふハはこね権現のミまつりときゝ
て女とちハまうのほる 近よしハあしむつかしけれハひと
り宮の下へ立帰る こゝハ谷合なれハ きのふ下りし坂を
のほりてゆくゝミちもせに夏くさしけりて たいらかな
るところになりぬ 道のかたハらにあやしきかやかのきあ
り 立より此ほとりととへハ二のたいらてふ名なり 此わ

たり萩すゝき生しけり秋まぢかほなるもいとなつかしう見
つゝゆくに さかの 嵯峨野 ミやき野ともいはまほしきさまにて
心行ミちなり あとよりこし人に此ところいかにとへハ
みやき野の原ときけハ

秋ハとくきて見はやさんをきすゝき萩のにしきをミや
きのゝはら

をミなへしなと色めきぬるも見過しかたく おりとも心
なのわさならむかし 早わらひのはるにおくれてもへ出る
もあり 山々のあひたなれと木立ハ見えす されと鶯の声
時鳥も聞えけれハ

春夏も秋もひとつにみやき野の山ほとゝきすうくいす
のこゑ

めつらしうあよりこし人ハ とく先になりゆく小笠をし
るへにたとりゆくもをかし 里か子

秋近くなりにつらしな真萩原ふミわけかたく見やきのゝ
原

とのほる坂ミちになりもてゆけハ よそミすなとていさめ
られても なつかしき野ハ帰り見かちにつえをちからにの
ほりつゝ いつしかあしの湯にいたりぬ 此傷ハい成わうの
にはひ深けれハ見しはかりにて過ゆく比 雨降出ぬれハ雨

よそひしていそぎゆく 道のかたはらにいしき池あり
うはか池とそいふなるよし もとさいのかはら地蔵堂を拜
ミ少しゆく ひたりの方にもあり こはせうしか池となん
見つゝゆく 此わたりよりミまつりのほり立なめ 遠近
よりつとゐくる人多くにきはし ミ社近くなりゆくひたり
の方を見やれハ湖あり これそぎつたへし水ウミなりけ
り 見わたし遠く風さへけふは吹ぬれハ浪立物すこし

あやしきはくミもしられす玉くしけはこねの山のミね
の水ウミ

といひつゝミ社にぬかつき ミまへにてうつくしきちこの
ミからありて神さひいとたふとし かたつかに曾我兄
弟ごとし六百五十とせなりけるハ五月なれと こんげんの
ミまつりのつひてにとて けふあらはにミたまものかたし
けなき物ともおかますと ききてよりておかミぬ あし
かのせきもほと近しときけハ ふりはへむことのかたけれ
ハ 見まほしうたとくしさにあなひ人してミめぐりぬ
おきてなることとしてこえ行もあり 帰路ハ道かへて畑てふ
ところにこよひはとまりぬ ミやうかやとて宿りしならや
のゆかりとて家あるしなと物かたりしぬ いろくさい
くしたる調度あきなふとなん さるは国のかみの行かひに

り 吹かせになミよるもいとおもしろし なといふほとに
いつしか宮の下に帰りつきぬ 人々待給ひこなたにも我家
に帰りしこゝちす

十五日 天気よし けふハかゝる山里さへあつたうま
しけれハ ふるさといかならんとおもひやりぬ

十六日 くもりてきのふにハにす いとすし 家つとに
とゝのへしもの ふやうなるものハかへしやらんとあつら
へやりぬ あしの湯へむかひの人出しぬ けふハ帰らすと
いふもあり帰り給ふといふありて たはむれにさけともち
のかけことす やかてむかひにいにし人帰りきて 今ひと
日ふた日ハ帰り給ハしといへハ 近よしまち子ハほこりか
にうちハあけつ ミたりハまけなれと うま酒ならぬうま
きもちもちひつ

十七日 けふもくもりてすし かのまめ人つれくしのな
くさに文などかし見せ給ぬ

十八日 雨おやミなし ふる里人けふハれいの哥かたりに
つとぬ給ふらん とおもひやられて

友 あなたにも思ひやすらん草枕露もワすれぬことの葉の

十九日 晴わたりぬ かね子帰り給ひて めつらしき人々

こゝをわたらせ給ひつゝ立よらせ見給ふとて あまたか
さりならへたるも めおとろくはかりきらくし 庭のさ
まもなへてならず 瀧なとありて木立をかしう やり水の
心はへすしけに こひふなと□□ゆる底意ふかく
をかしき宿りなり

十四日 よへより雨降いて立いてん空なく 晴間を待や
すらふ 巳とき過る比晴わたりねハ立いつる かね子ハあ
しの湯をあみて見んとて たよりよき道をともにゆかはや
と あるしにとへハ うしろなる坂近しときゝてのほりゆ
くに 照日をせはひいとくるしう 右へゆきひたりへたと
りつゝうつしゑに見しはかりなる山道をくたりくる人もあ
り こゝを瀧坂ときゝて

老いの坂かつくはくれハたき坂の瀧におとらぬあせ
なかつ哉

なとたはむれいひて つゑをのみちからにわけのほり か
らうして石塚ある 立より見るに ひたりあしの湯道なと
しるしあれハ こゝよりわかれ行給ふも心ほそしや など
かたみに袖ハ露けし ほと近けれハおくりゆく人の立帰る
を待やすらふ こゝよりくたる坂ミちは心やすし かのな
つかしきミやき野を見わたす 山々ハなへてすゝきのミな

とあひ宿りせしことゝもかたりくらしぬ 旅ねの人々七湯
を題にしてちやはんとかいふたハむれことをしてつれく
の心やり給ふ 近よし宮の下にあたり 家あるし木質に
あたりて其用意深くをかしきことかきりなれと ことむ
つかしけれハしるさす

廿日 雨降ぬれハ朝いす

雨そゝきかけひの水の音たへすミな月の名にたかふミ
山辺

廿一日 けふもひねもす雨 つれくのなぐさにおのかし
心をやりて 千代までもよはひのふへき心ちす ふすまの
さくらをなかくらして

あかぬかな我心まてうつしゑのさくらを友とミ山辺の
宿

とひとりこちぬ

廿二日 浅草のぬしに文を帰し参らするとてせうそこす
はしめてわけのほりしあしからの山の にしひんかしのわ
かちたにしらてたとくしきを すかのねのねもころにを
しへさせ給ひて めつらしきところくをともなひ見せた
まふミ心さしのうれしさよ

浅草の君としきけとあさからぬめくミのほとをミやま

への宿

大江戸の名所図會などハことにくりかへし つれくなく
さめ侍て

おもひきや東のミヤご名ところをはこねの山にやとり

見んとハ

めつらしう心はかりを つかみしかきふてして ふところ
紙にかきておくりぬ

廿三日 晴 朝日めつらしとおもふうちに やをらかきく
もりて小雨ふりいづ

廿四日 けふもはれくもりきのふのことし 小田原の^寄かう
のとの^殿につかへまつる何かしの母としとて ここに來給ひ
しはやくよりまち子しれるとてゆくりなくたいめし^寄 お
のをさへしり給ひて 何くれと過にしことゝもひねもす
かたりあひたまふ とまなひ給ひしハ小田原のまちなる小
西てふの家としむすめなとつれたまへハ 日ことゝひと
れまち子里可子などのよきあそひかたきなり まち子

めつらしく君もあゆミをはこね山よりあわんとハしら
糸のたき

とかきてかの母としに見せ参らす

廿五日 けふもおなしミ空なり 夕つかた直かつといふわ

とふることによそへてかきつく かくてハとおもひおこし
て立いつ ミおくり給ふ人々の浅からぬそいとうれしう
かへり見かちにくたりてむまの時ばかりに東の沢につきぬ

傷あミしてしはしやすらひ立出 傷本にいたりぬ 近よ

し 里か子 まち子ハこゝにこよひハとまりぬ おのれら

ハ^{阿夫利}あふり山にまうてんとて わかれ立いつる 山辺にてハ

たえてきかさりしからすのねくらをいそくこゑもめつら
しう とともに小田原のすくにやとりもとむ

廿九日 雨降出れとつとめて立いつ いづつミなと過ゆく

比ハしきりにふりぬれハ 夢こゝちにて過ぬ 大井てふ

ところすきゆく比晴たり 四のくほてふところ過ゆくに

此わたりなへてたはこ作れり 畑も多けれと山路のミなり

なてしこの花咲初なつかしきミちなれハ こゝよりかち
にてゆく

なてしこの花のえかほを見つゝけふいくの山路こへて

來にけん

十日市場てふ所にてしはしやすらふ こゝハ家居もなミた
てゝにきはし 野辺にいつれハ心さす雨ふり山近く見多て
うれしう はたのほりゆく坂ミちハいとかたし 暮近くな
りて大瀧のもとに立より ミ山のはふり間下氏にやとりぬ

かう人來給ひ暮なと打あそひたまふに あられふるかしま
かさきにて生出たまひしとききて 村上うしのことなとか
たりあひ ミヤひ男にて日記なと見せ給ふにをかしきとこ
ろくはうつし系書給ふ しら糸の滝にてよミ給ひしハ

そことしもしらぬいはねのしたゝりもつもれハかゝる

俺の白糸

とありける ここよりもよからねとかきていたしぬ

廿六日 けふハふる里へ立帰らんとおもうたまへと雨おや
ミなければすへなし しかすかに晴間もやと旅の調度とり
あつむ 日数俺にうたれけれハ髪ハおとろくしうあしか
らの山うはにもことならず 今更立いてんにハとてくしけ
つりなとしつゝ およひをりてかそふれば十はた三十たら
す日かすへぬるにおとろかれ ふる里人いかに待たまふら
んと空をのミまもらる

廿七日 けふも雨やます いと寒く立出ん空なし

廿八日 今朝ハめつらしう晴けれハ したしうむつひかハ

せし人々にわかれをつけさゝくミカハしつゝ かたミにな
こりをし立出まうし

今ハとて宿かれぬとも友と見しせうしの桜われをわす
るな

七月つきたちとなりぬ 空晴ぬれハつとめてミ山にのほる

いしの坂なれハ いとらうたくては^道ふくすのことし か

らうして御堂をふし拜ミ とまなひしをのこ石尊宮へまう
のほるあいたミたりハまちやすらふ 遠近より教しれすま

うてくる人あめれは 見しれる人もやと見やるに 高正ぬ
し 浪磨ぬしと見るよりはしり出て ゆくりなくあふそう

れしき されと立わたる人のしけゝれハ かたミにつれに

し人またせんもと こと葉残してわかれぬ 帰り路ハ女坂
なれハやすく下りて 子安 いせ原なと過ゆき暮なんとす

れハ 一の宮てふ所に宿る

二日 てい気よし 傷本にて おくれし人々藤沢にて待わ
ひたまふらんといそぎ立出 むま近くなる比ふし沢のやと

りをたつねあふ こゝよりうちつれて江のしまにわたる

はたとせむかしまうてけれハいとゝめつらしうミやしろを
拜ミ またこんこともかたけれハいは^{岩屋}やへもともに行めく

り児か洲にてこととへハ むかしかまぐらの相乗院に住給
ふ白菊となんいひけるちこを けん長寺の沙門自休藏主此

しまにて見せめしおもひわすれかたくて おくれる文千つ
かにつもれるをせちにやおもひけん ある夜まきれ出て此

しまのわたしもりに 我をたつぬる人あらハあたへよと

あたへし扇に

志ら菊と忍ふのさとの人とハ思ひ入江のしまとこた

へよ

と書て此ふちに身をしつめしとなん 自休たつねきてともに入江の志まそうれしきといひて おなしふちにミをなけしとなん さらすハミちのおくのしのふの里の人なりときゝて

とふ袖も露さかりけり志ら菊を忍ふのさとの人のしのひて

七里か濱を過るころハ 風あらく塩ミちぬれハ かひもひろはし 梅土の子ともハいさゝかななるものもミにまとハて打寄るあらなミの中へとひ入なとしつゝ いミしうて 見るめさへいそしかりけり梅土の子ハ打よする彼の花をかつきて

行あひの河も名のみなりけり はせのくわんせ音大佛をも拝ミて かまぐらのゆきの下にやとる

三日 天気よし 朝とく靄かる八まん宮をおかミて かね子ふし子ハ大江戸の方へわかれゆきたまふ 四たりハふるさとをいそぎぬれハたよりよき野しまよりわたらんとてわかれゆく 道のほとりなるあからの天神を拝ミ 杉本寺ハ

御引なをしねきたてまつる

王くしけはこねなる山ほとゝきすを宿りの友と聞なし給ひつゝ うき事は更にしらいとの瀧のよとみなくミ心にこきて 明暮山のかひ有ミゆし給ひつゝ 山のゐの心深からぬ友にさへむつまじミ給ひけん いとوراやましうおもひ給ふる 彼宮のしたなるやとりのせうしに絵書たる秘よりも 御ことのはの花のかくはしきに いかてか筆くはへ侍らんとゝをかしとのミ繰返し おのれも友に草枕する心ちして 巻のとちめになるまゝに 夢のさめぬとおほえ侍りぬ かなたりの若なときけとことのはの花にはひのミちける物を

一枝

「はこね日記」抄

史の会

一 喜勢子を巡る三つの「家」

「はこね日記」の著者稻村喜勢子は、寛政二年（一七九

坂東一のふた所ときけハ 深きつゝのとめ給へとふしおかミて 巳とき過る比かな沢にいたり 千代本てふはたこやに宿る

四日 朝とくおきいてゝ 此わたり名たゝる八景を見まほしくおもへと あやにくに霧ふかうして見えわかつ

ことの葉のおよはぬミには見せしとや霧立かくす

かな沢の浦

といひつゝふるさとの舟きぬれハのりぬ されと風あしくとてこき出です 野しまかさきにかゝりゐてかせ待ほとに やかてよきおひ風吹いてゝま帆かけ しはしまとろむ夢のうちに富津の浦に舟つきぬ ゑにしあるおり本に立よれハ老給ふ人をはしめよろこほひたまひ こよひハこゝにとの給へと心せかれて立出 ふるさとのこゝそいひ野となつかしき小萩か本にとまりぬ 母君をはしめよろこほひ給ひて ねもやらす夜もすからかたりあかしぬ

五日 天気よけれハ 近きうちにまゐこむとて いそきたちいつ 四つ過る比 木更津につきぬる すもりし人もけふハとて ちりうちばらひなとして待よろこひぬ

いたつらにミハおいぬれとことの葉ハまたかたなりのわかなゝりけり

○ 木更津の「稻次家」に生まれ、十六、七歳頃下飯野村（現富津市下飯野）の「稻村家」に嫁し、更に晩年を娘の嫁ぎ先である富津村の「織本家」に過した。彼女についてはこれまでにいくつか論考があるが、この三つの「家」を中心に喜勢子の一生の輪郭をなそてみたい。

江戸時代の木更津は大坂の陣に貢献した褒賞として幕府からいくつもの権限を与えられており、房総随一の勢力を誇った港として賑わっていた。そのような木更津にあって喜勢子の生家稻次家は、古来藍屋という屋号で薬種業を営み、豪商として名を馳せ、幕末には日本長者番付に名を列ねるほどであった。この稻次家に育った喜勢子は、江戸の岡田真澄（儒官岡田寒泉の子）に師事し、和歌・国学を学んだ。また弟真年は幼時より里見騰雲に学び神童の名が高く、長じて漢詩・和歌を善くしたか、三十五歳のとき松島に遊びそこで病没した。このように稻次家は町人ではあつても代々学問・文芸を重んじる家風があり、文人や学者等の遊歴者の多くも旅の途上稻次家の世話になった。

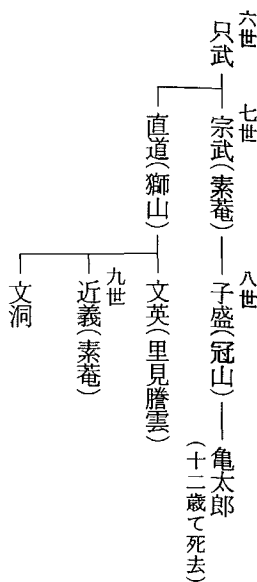
旅の俳人であつた一茶は、享和三年から文化十四年の間（一八〇三—一八一七、喜勢子十三歳から二十七歳にあたる）、西上総の地を十数回にわたって訪ねている。そのコー

スは舟で木更津に入り、陸路富津に向かうということが多かった。木更津での宿泊先のひとつが選^{せん}_{ちやく}寺であり、そこに俳僧雲哉がいたことはよく知られていることである。

ところでこの選^{せん}寺とは稲次家の菩提寺である。つまり稲次家と一茶とは「選^{せん}寺」という共通項を持つていることになるのだが、直接の接触はなかったのだろうか。

ここで稲次家と選^{せん}寺の位置関係を確認しておきたい。昭和初期に警察署のあるところが稲次家の跡地であるが、その頃の鳥瞰図を見ると、両者はまさに同一の敷地にあることが明らかなのである。豪商とその菩提寺が同じ敷地内にあるということは、日常的に極めて親密な関係であったと想像される。「はこね日記」の中に「鶏頭山大徳のミもとよりせうそこして云々」とあるが、選^{せん}寺の号は鶏頭山であり、喜勢子は箱根に旅立つにあたって、選^{せん}寺の僧から手紙をもらい、送別の歌を受け取っているのである。そのことは結婚後も長く親しく関係がつづいていたということを示すと同時に、その関係のあり方をも示してくれている。

これらのことを総合すると、稲次家は一茶と何らかの交流があった、と考えるのが自然であろう。



喜勢子の夫近義の実父は、高名な学者として知られる一方、医師としても疱瘡の治療を得意とし、回生の名手といわれ、飯野藩の郷医として名を残している稲村獅山であるということになる。近義自身もまた飯野藩医を勤めている。冠山に嗣子がなかったため、血縁関係にある近義が跡を継いだのであろう。また喜勢子の弟真年の師であった里見膳雲は実兄になる。近義の生まれ育った稲村家は、教養の高さという点でも並々ならぬものがあつたといえよう。卒年から逆算して、近義は喜勢子と同年生まれであることもわかる。

二人の墓の左隣に、織本、稲次両家による喜勢子の歌碑が建っている。

つづいて喜勢子の一人娘勇子が嫁した織本家についてみてみよう。房総の女流俳人としてその筆頭に名があげられ

次に喜勢子の嫁ぎ先稲村家についてみてみよう。富津市下飯野飛付に「琴塚」と名づけられた墓所があり、そこに喜勢子の墓がある。今でも純農村地帯である。畑の一角にこんもりと木々にかこまれた琴塚の前には、飯野地域活性化推進協議会による案内板が立てられており、それによると稲村家は安房国里見家の子孫で代々名主を務めたという。喜勢子夫婦は一つの墓に眠っており、その墓石の正面に 歸空院鹿嶋君玉居士／大空院蓮開緑珠近住尼 とある。また、右側面には、

稲村隠岐九世之孫名近義実 獅山君
之次子出為 冠山君嗣号素菴後改水
哉精於疾醫旁善國風 天保十四年癸卯
三月十三日 疾卒年五十四

と刻まれている。これによると、近義は、獅山の二番目の子として生まれたが、冠山の跡を継ぎ稲村隠岐九世となり、号を素菴と名乗り医師としてまた国を良くするために尽くした、ということになる。

ここで前述の案内板と琴塚にある稲村家の墓石に刻まれた文字に基づいて系図にすると、次のようになる。

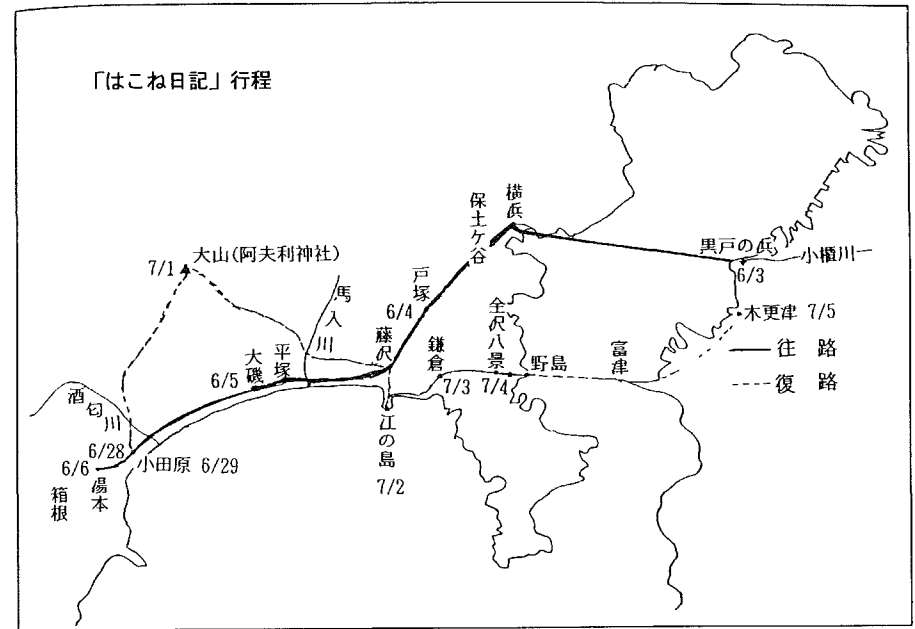
る花嬌の嫁ぎ先でもあり、やはり代々名主の家系である。花嬌の孫重固(号南塘、通称嘉石衛門、後永世と改む)と勇子は結婚した。織本家現当主哲郎氏にうかがったところによれば、当初重固が稲村家に婿入りしたが、織本家の跡取りが亡くなったため戻ったものという。喜勢子は晩年を織本家に過ごし、万延元年(一八六〇)、七十年の生涯をここで閉じた。

以上、三つの「家」について述べてみた。いずれもが名家である。その中に生きて喜勢子は、折りにふれて歌を詠み、旅をして紀行文を書いた。今回「女の史料」に載せた「はこね日記」の他に「かしま日記」「安房の日記」「鋸山の日記」「緑珠歌抄」等が織本家に残されている。

(安田益子)

註

- 1 代表的なものは次の二つである。織本泰「歌人稲村喜勢子」「千葉文化」二巻 一九四〇年、田辺弥太郎「房総歌人伝」「房総展望」十二巻 一九五八年
- 2 信濃教育会編「享和句帖」「文化句帖」「七番日記」「一茶全集／第二巻・第三巻」信濃毎日新聞社 一九七七年
- 3 一茶著『七番日記』中の文化十四年五月十一日に「木更ッ



二入 中島宗純同道有鞠会」とあり、河田陽氏は著書『木更津』（河田陽・松本斗吟著 新千葉新聞社 一九五六年）において、これは稲次家における鞠会であると述べている。

参考文献

『木更津郷土誌』木更津市 一九五二年
『富津市史 通史』富津市 一九八二年

二「はこね日記」の旅

喜勢子はどの様な旅をしたのだろうか。この日記に著された箱根への往来を辿ると、黒戸の浜（現木更津市畔戸）を舟出した一行は、東海道を上り、およそ九十四キロの道程を四日で見送り箱根に到着している。下りは大山から江の島を経由し百四十キロを七日で帰郷している。そこで、この往來の行程、方法及び費用から、喜勢子の旅について考えてみたい。

まず喜勢子達の行程を日毎に分け、更にそこでの行動を項目別に整理し、まとめてみる。すると、一日当りの進度は二十四キロが最も多く、最長が四十キロ、最短は三キロであることが分かる。これは一日の行程が平均四十キロと

言われる江戸の旅に較べると約半分、ゆったりと余裕のある旅である。体調のすぐれない夫近義への気遣いであろうか。しかし往路の箱根湯本・宮の下間を別にすれば、喜勢子の「日記」からは名所巡歴の様子が窺えるのである。物見遊山の旅であろうか。

次に賃金及び旅の方法について見てみよう。

慶長六年（一六〇一）正月に伝馬制が施行され、五街道では將軍の朱印や老中など幕府重職者の証文を携帯する特權的通行者を優先し、かつ無賃で次宿へ継ぎ送ることを目的として設定された。同様に脇街道でも公儀御用を中心に組み立てられ、庶民通行の便宜は後まわしにされた。庶民が宿駅の人馬を利用する場合は、その合間をぬい、しかもその運賃は相対賃で、大名等の御定賃のほぼ倍額を支払わねばならなかった。これは伝馬役負担者の犠牲分を庶民が補填し緩和したのである。東海道の賃金は正徳元年（二七一一）のお定が基準となり、その後は物価騰貴に伴いこれを元賃として、三割または四割増と相対価で表わされた。

さてこの旅には馬入川と酒匂川の二つの川越がある。

喜勢子が最初に渡った馬入川の「川明き」は川役人の瀬

踏みで決められ、「川明け」「川留め」共に人馬同時で「船渡し」が行なわれていた。喜勢子は「馬入河を渡」とのみ記している。また翌日には酒匂川の上流を渡る。この川は石の川なので、岸に舟を寄せるとき舟底と石が軋み、その轟音を雷鳴と間違えたり、渡し守りから聞いた下流の東海道での蓮台渡しについて記している。喜勢子は両川共に舟で渡ったと思われる。「春は土橋あり、夏はかちこし、三町川下は大海也」と『東海道巡覧記』（一七四六年）にある。これは東海道の酒匂川越えのことで、渡し場は現在の酒匂橋の渡り口で、小田原側は橋の百二十メートル程川上であった。梅沢で喜勢子と別れた近義はこの渡しを利用している。

この酒匂川の渡しには水標があり常水との比較で「明け」や「止め」が決められ、また水量や用向きおよび賃差により渡河の方法や順序が定められていた。一番先に出るのは蓮台で御伏箱が最初に渡る。この「蓮台越し」の場合、一般の旅人が利用したのは梯子に似た形の平蓮台で、一人で乗る時は四人で担ぎ二人乗りの場合は六人で担いだ。二番目は「肩車越し」で川越人足の肩にまたいで乗る。平生は人足一人で越すが増水時は補助がもう一人つく。三番目が

「馬越し」。人や荷物を乗馬のまま人足が付き添って越す方法で、一般の旅人には許されなかった。四番目が「棒渡し」である。これは無賃者を川越しさせるもので、細長い丸太の両端を待川越二人が持ち、それにつかまって渡る方法である。

以上これらの川越運賃については明確な規定が無く時代や水量により増減があったと見える。元禄九年（一六九六）の大井川の料金は水量が股下で四十八文、腰下で五十二文、腰上で六十八文、乳まで七十八文、肩まで九十四文、そして担ぎ手四人の蓮台の場合は、およそ三百文であった。

さて、この旅は木更津港を出て富津港へと帰着するまで船旅に始まり、船旅に終わる。この時の船賃はどの程度であろう。ちなみに江戸から成田に詣でる時、深川高橋から行徳まで約三里の船旅で乗合賃は五十文とある（年代不詳）。また名古屋から桑名への七里の渡しは、六十八文（安永五年）、後には三十五文（天保十年・弘化三年）との記録もある。しかし今のところ房総と三浦半島を結ぶ船賃は不明である。

この箱根の旅の費用については、年代や地域により賃金が異なるなど不確定で不明な点が多く、概数も把握できない。

ない。ただ箱根そのものは古来有名で江戸期も天保十二年五月の市村座「花喜いろは連歌」箱根宮の下場面には、喜勢子も滞在した宿「奈良屋」が登場している。詳細な案内書の刊行が遅れたためか、単に喜勢子達が知らなかっただけかは不明である。いずれにせよ喜勢子は箱根については何も知らなかったのである。

ところが、喜勢子が小田原の手前で近義と別れて詣でた「いづみの観世音」は『東海道名所図会』にも記載はなく、他の旅日記等にもみられない。この飯泉の観世音とは小田原の北方二キロ、酒匂川の東岸に位置する真言宗勝福寺である。本尊は十一面観音で坂東三十三観音の第五番札所となっている。ちなみに喜勢子が詣でた鎌倉の杉本寺は一番、長谷寺は四番の札所である。喜勢子はこの旅をただの物見遊山に終らせず、折に触れて祈願することも心懸けていたのではないだろうか。（小暮雅子）

参考文献

- 今井金吾著『今昔東海独案内』日本交通公社 一九九四年
『神奈川県の歴史散歩』山川出版社
『「広重五十三次」を歩く』NHK出版 一九九七年

かった。これは今後の課題としたい。

この旅の行程は木更津と小田原間で同じ道を往復せず、往路は東海道の名所を巡り、復路は大山と江の島の二社参りを済ませ鎌倉から金沢八景へ出て野島より舟出するなど巧みに名所巡りを取り入れている。

江戸中期以降これらの名所は「名所図絵」や旅日記などの各種の刊行物に頻繁に登場し、また江戸からの手軽さも受け、大勢の人々が訪れていた。喜勢子達の綿密で周到的な行程からは、まさに彼等も熟知していたことが窺えるのである。このことは「初めて」と記す箱根で同宿人に教わり、伴われて見物した様子や、往路で湯本から宮の下に向かう三キロの山道をただひたすらのぼり、途中の名所旧蹟も全て素通りした最初の行動と、復路では同じ道程を、箱根七湯の一つ塔の沢に立寄り「湯あみし、しばしやすらふ」など、知り得た情報をもとにより快適な旅へと変えていったことからみてもとれよう。箱根については江戸期箱根案内の白眉とされる「七湯の枝折」が文化八年（一八一二）に成るが、その伝来の多くは写本で刊本は未だ発見されていない。幕末弘化年間には「箱根七湯温泉図会」として省略本が刊行されているが、喜勢子が旅をした頃はまだ出てい

三田村篤魚『江戸生活事典』青蛙房 一九五九年

『箱根七湯 歴史とその文化』有隣新書

『鎌倉・横浜・湘南三浦』日地出版

三 旅装

水無月の初め、箱根での湯治へ旅立った喜勢子達一行は、どのような旅装をしていたのであろう。

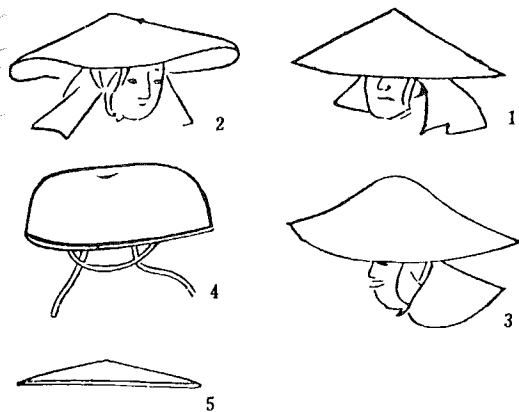
喜勢子が箱根に出かけた天保年間、歌川広重は「東海道五十三次」シリーズ八種のうち初期の三種を刊行している。「保永堂版」天保五年（一八三四）、「狂歌入東海道」同十三年（一八四二）、「行書東海道」同十三年である。

「保永堂版」は広重の出世作となった代表作でもある。その序文に狂歌師・四方滝水は「まのあたりそこに行たらんこゝちせられて、あかぬ所なければ、後の世にも伝えまく」広重に描かせたと記している。実際の景色を目の当りに見ているかのような写実的表現と、喜勢子の旅と同じ天保年間に描かれたという二点から、広重の前記三種の「東海道五十三次」を史料とし、喜勢子の旅装を考えてみる。

「保永堂版」五十五枚中、女性の旅装は十二枚に描かれ、そのうち巡礼姿二枚、替女一枚、老女一枚、八枚が一般の

旅姿である。

この八枚に描かれた姿は、頭に笠を被り、表着の上へ浴衣等の木綿の単衣をつけ裾高におはしよりし腰紐で結んだり、裾をからげたりしている。脛には脚絆をつけ草鞋をはく。足には指が描かれ素足に草鞋ばきと見える。手には杖を持つ。笠は旅人には必需品のようで、男女を問わず用いている。被ったり、手に持ったり、稀に持たない場合もあるが、笠をつけない時には頭を必ず手拭で覆っている。笠も直に被るか、ときに手拭で髷を覆いその上に被る場合も



1 菅笠図 喜田川守貞『守貞漫稿』より

ある。

江戸期「笠」は「傘」と区別する為、特に「かぶりがさ」と言われ、縫い笠・編み笠・張り笠・押え笠・組み笠・塗り笠が作られた。材質も藁・藁・藁・松・杉・竹・菅・蒲・葵葉・棕櫚皮・布・紙・獣皮と多種にわたり、形も円盤形、円錐形、円錐台形、帽子形、円筒形、半円球形、襷折形、桔梗形、漏斗形、二ツ折形と多様である。用途は雨笠、陽笠、陣笠として用いられ、使用者により、市女笠、虚無僧笠、六部笠と称された。また産地名をつけ尾張笠、信楽笠、加賀笠と称する等、多種多様な笠が作られ、盛んに用いられた。文化七年（一八一〇）大坂に生まれ天保十一年（一八四〇）江戸に出て深川に住んだ喜田川守貞は、その著書『守貞漫稿』（天保一嘉永）に「今世に三都とも婦女旅行に非れば笠を用いず 市中には晴雨ともに傘を用ふ 今世は都会には三都ともに左図の菅笠を用ふ」と記し（図1、「三都とも旅行の婦女及び田舎の婦女田植其他農事を営む等皆比菅笠を用ふ」と図1-4の菅笠を示している。平安時代の市女笠、桔梗笠、江戸時代の殿中、三度笠、襷折笠、さんざら笠、加賀笠、菅笠、平笠などは菅を材料として作った縫い笠である。これだけ多種で武士や町人等あ

豪商の娘には袖合羽は当然の装いかもしれない。

らゆる階層の人々が被ったという菅笠である。「保永堂版」に描かれた笠の形からも、旅装の女性の被りものは菅笠と考えられよう。喜勢子も菅笠を用いたと思われる。また帽子のように頭部をまとう置手拭は江戸時代には広く女性の間で行われた。

九日「女とち滝にうたれんとて髪あらふ」二十六日「日数滝にうたれれば髪ハおとろおとしふ あしからの山うはにもことならず」とある。喜勢子は置手拭のたしなみを行わなかったのだろうか。

ところで喜勢子の旅の半分は雨にあっている。文中に「あまこしらへ」とあるが具体的には述べられていない。

十五世紀の中頃、南蛮人からもたらされた合羽は江戸時代に入ると当初のラシャ製から紙や布で作られるようになる。またケープ型の丸合羽から着物仕立に作られた袖合羽となり武士から庶民に至るまで着用された。町家の子女が着用するのは享保以降で上流の子女に限られていた。中流以下の子女は雨でも道中と同じに表着の上に浴衣を被り腰紐で結んだ。文政の頃からは広く上下にわたり、合羽を着用するようになったようだが、「保永堂版」では窺えない。喜勢子の場合はどうであろう。幕末の長者番付に名を列ねた

天保十年、平亭銀鷄は『江の島もうで、浜のさき波』で「草鞋は旅人のためには甲冑に同じ。価を惜しまずよき草鞋を求めてはくべし」と述べている。江戸後期には旅の心得集、名所案内の類が多数刊行され、広重の「東海道五十三次」も弘化・嘉永・安政年間にかけて「隸書東海道」「美人東海道」「東海道風景図絵」「人物東海道」「堅絵東海道」と刊行される。これら多種多様の刊行物が旅の導となり人々を誘ったであろうし、旅は案外身近なことであったのかも知れない。喜勢子も幾度か旅に出て日記を著している。

（五味寛子）

参考文献

- 宮崎紘『笠の民俗』雄山閣 一九八五年
宮本馨太郎『かぶりのもの・きもの・はきもの』岩崎美術社 一九八八年（再版一九八一年）
今野信雄『江戸の旅』岩波書店 一九八六年
山口桂三郎編『名品揃物浮世絵 広重II（道中物）』ぎょうせい 一九九一年
白石克編『慶応義塾 高橋誠一郎浮世絵コレクション——広重 東海道五十三次』小学館 一九八八年

四 旅立ちの年

この旅はいつのことなのか。「はこね日記」には六月三日の旅立ちから七月五日に帰郷するまで一日も欠かさず毎日の天気や行程と暮しぶりが綴られている。しかし年号の記載はなく、他にこの旅についての記録も残されていない。そこでこの日記の内容から年号の推定を試みることにする。喜勢子が旅をした箱根には古くから権現社が祀られ名所となっている。この境内に、かつて同社の権児を務めた曾我兄弟の弟五郎時致を祀った「勝名荒神」(現曾我神社)の石社がある。⁽¹⁾ここで平成五年(一九九三)五月二十八日、同兄弟の没後八百年祭が執り行なわれた。

ところで箱根に滞在した喜勢子は、六月十三日この権現社の祭りに出かけた。その折「曾我兄弟ことし六百五十とせなりけるは 五月なれと権現のミまつりのつひてにとて けふあらはにミたまものかたしけなき物とおかますと きゝて よりておかみぬ」と記している。つまり喜勢子は兄弟の没後六百五十年に、この権現社を訪れているのである。このことからいつのことなのか幾通りか考えてみよう。たとえば八百年祭と同様に、仇討がなされた建久四年(一九三)に、単純に六百五十年を加えると、天保十四年

(一八四三)に当る。しかし、当時の「数え年」を用いると、同十三年とも考えられる。いずれにせよ天保十三、四年前後の年と考えられる。

ところで、この旅は「いとよわくなりて たれこめかちなる」夫近義の健康を気遣って行なわれた。しかし、この近義は天保十四年三月に他界している。従って、箱根の旅は天保十四年より以前に行なわれたのである。

ではいつであろうか。観点を覚えてみよう。喜勢子の日記は毎日欠かさず記されている。この日付から暦日を特定できるのでなかろうか。

天保十二年、幕府に改暦の議が起り同十三年三月改暦が宣下された。

陰暦にも大と小の月があり、太陽暦とは異なり三十日と二十九日で、しかもどの月に当るかは定まっていない。しかし天保の改暦で中気(冬至・春分・夏至・秋分)を含む月(十二月・二月・五月・八月)を定め、間は中気を含まない暦月に置くと定められた。⁽²⁾喜勢子の日記は六月二十九日の次に「七月つきたち」と記している。従ってこの六月は小の月である。『日本陰陽暦日対照表』⁽³⁾によると天保十四年の近辺で小の月に当る六月は、十年と十三年で共に閏

月でもない。しかし仮に何らかの事情で三十日を記さなかった場合を想定すると、十一年と十二年も否定できず、この四十年のどの年にも該当する。

では何年であろうか。日記にはこれを解明するもう一つの鍵が残されている。気象である。喜勢子は毎日の天候を克明に記している。この旅は梅雨明けの厳しい暑さが始まる頃の出立である。快晴と暑さは六月三日より四日間続きその後三日間は崩れ、再び十日より好天となり十五日には頂点に達する。「かかる山里さへあつけさうましければ 古里いかならん」と思いやられる程の暑さである。しかし、この日を境に天候は一変する。十六日「曇りて昨日には似す いと涼し」この後涼しく、曇り又は雨の空模様が続く。七月に入り天候は回復し晴天となる。これが箱根へ旅をした年の大まかな気象の傾向である。

箱根の天候は山里の常で非常に変わり易い。しかし、気象の推移を、日毎ではなく一カ月または夏期等の大きな枠でとらえると、年毎の異なる傾向がみられるのではなからうか。また関東、さらに関東南部と、局地的にとらえる程それぞれの傾向の相違は顕著になる。

そこで関東南部に位置する神奈川県箱根町、同県横浜

市、同県に隣接する東京都千代田区の三地点の気象から比較検討を行ってみよう。史料は「箱根日記」「蘆湖紀行」(以上箱根)、「関口日記」(横浜)、「井関隆子日記」(東京)である。

天保十年、約一カ月の間雨は一日も降らず連日快晴(関口日記)。この年では無い。

天保十一年、前半の二週間は曇り又は雨で、晴天は一日も無い。十八日から三日間快晴で、再び曇りの日が続く(関口・井関日記)。この年でもない。

十二年、十八日まで二週間晴天が続く、同日の午後から崩れてくる。十日程の曇天の後、再び二十八日の午後晴天となり七月初めまで好天が続く(関口、井関日記)。数日のスレはあるが傾向は似ている。

十三年、六月三日より四日間晴れ、なか三日崩れた後、十日からまた快晴となり十五日まで続く。十五日「晴天風無之熱シ」(関口)、「暑さ堪難かりし」(井関)と相当な暑さである。しかし翌十六日には「時のかはれるにか」(井関)と思われる程の涼しさとなる。この曇り又は雨がちの涼しい天候は月末まで続く。七月一日より連日快晴となる。この十五日を境に一変する気象の傾向は、喜勢子の日記に

もみられ、変動の周期も同じである。十三年であろうか。しかし十二年も似た傾向を示している。

では十二年の箱根の気象をもう少し詳細に見てみよう。同年六月四日から二十日まで箱根芦の湯に滞在した塩埜轍の「蘆湖紀行」には、四日晴。翌日より三日間天候の記載なし。八日より朝に霧がでて日中晴れの日が続く。十五日晴、日は照っても風は涼冷、夕雷雨。十六日朝霧。日中晴れ、午後地震。夕雷鳴。十七日も晴、夕雨。と連日典型的な夏の様相を示す。十八日快晴、箱根に来て初めて暑さを感じる。一方喜勢子の場合は十五日の猛暑が一変し十六日から涼気に遭う。そして十八日「雨おやみなし」終日雨であった。同じ箱根での気象である。全く別の年と考えざるを得ない。

「数え年」の六百五十年祭に当ること。六月が小の月であること。気象の傾向と周期が一致すること。これらは悉く一つの年を示している。

喜勢子は天保十三年六月三日、黒戸の浜を発ったのである。それはグレゴリオ暦一八四二年七月十日のことであった。

この旅の八カ月の後、近義はこの世を去る。喜勢子数え

五十四歳の春のことである。

(長谷川郁子)

註

- 1 箱根神社神道資料室「曾我兄弟」曾我兄弟八〇〇年祭記念特別展パンフレット
- 2 天社土御門神道本庁造曆部編『萬年曆』精明社 一九六一年
- 3 加藤興三郎編『日本陰陽暦日対照表』ニフトー出版企画 一九九三年
- 4 塩埜轍「蘆湖紀行」『濱乃真佐子』神奈川県立図書館蔵 天保十二年(一八四一)
- 5 横浜文化財研究調査会編『関口日記』八・九巻 横浜市教育委員会 一九七六年
- 6 深沢秋男校注『井関隆子日記』上・中巻 勉誠社 一九八一年

*本稿の執筆にあたり、原本所蔵者の織本哲郎氏はじめ箱根町立郷土資料館と箱根神社の皆様、および関氏子氏にご協力とご指導を賜りました。ご好意に感謝申し上げます。

執筆者一同

歴史の窓

たよ女について高校生達は

どのように学んでいるのか

(定時制高校生の国語科の学習から)

本多節子

一 はじめに

『近世おんな旅日記』を拝読し、柴先生に親しくお便りを差し上げた事が機縁となって、私が勤務する「福島県立あさか開成高等学校須賀川校舎」の国語科の授業で、「郷土の俳人達について、どのような授業展開を行っているのか」を記述する機会をいただきました。

須賀川の街は、芭蕉が一週間ほど逗留したことで著名です。芭蕉の逗留を頂点として、元禄期に、須賀川の俳壇は非常な活気を呈しましたが、それ以後もますますの業績を残し、等窮・晉流・雨考・たよ女・壮山と明治時代までの

俳人を数え上げても、枚挙に暇がありません。授業の中で、すぐれた俳人の生涯や句風、俳壇に及ぼした影響などを明らかにして行くことは、須賀川の街の文学的、経済的、地理的な歴史を明らかにして行くことでもあり、生徒達の興味・関心は高いのです。

「須賀川校舎」は、定時制の普通科のみの高等学校です。生徒達にとって幸いなのは、独立校舎のため、遠慮なく施設・設備を使用することができるといふ点にあります。けれども、他所へ移転した農業高校の施設・設備をそのまま利用しているため、老朽化しており、寂しい限りです。近年、定時制高校に第一志望で進学する生徒は激減しており、須賀川校舎の場合も、半数の生徒が第一志望であったに過ぎません。中学校時代に不登校であった生徒達、学力的な問題から全日制へ進学できなかった生徒達、働किながら学んでいる生徒達とともに、それぞれの問題を内包しながら、日々学んでいます。

国語科の授業では、基礎的な学力の充実を図ることが第一と考えています。さらに、その学習を仲立ちとして、郷土の文学的な歴史に目を向け、学ぶ「きっかけ」を感じ取らせることも、四年間の学習の中で大切なことと考えてい